

「実践報告」

児童の課題発見・解決活動を促す動画比較を活用した授業実践

松永 光曜（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

倉田 伸（長崎大学教育学部）

篠崎 信彦（長崎大学大学院教育学研究科）

呉屋 博（長崎大学大学院教育学研究科）

本実践研究では、児童が「自ら課題を発見し、それを解決していく過程」に焦点を当て、小学校体育科（マット運動）において、児童の主体的な学びを支援するための教材・教具の活用に関する試みを行い、今後の指導の在り方に関する課題を明らかにする研究を行った。教材・教具の活用に関する試みについては、児童の課題発見を促すために「手本の動き」と「比較したい動き」の2種類の映像をタブレット端末で比較する「動画比較」を行い、その有効性を検証した。また、今後の指導の在り方に関する課題については、「授業映像」や「授業で使用した学習カードの記述内容」、「運動有能感測定の結果」、「課題発見活動における動画比較が役に立ったのか調べるアンケート調査の結果」を基に分析・考察を行った。その結果、課題発見活動における動画比較の有効性については、活動に参加した約9割の児童が肯定的に感じていることがわかった。また、児童が自ら課題を発見し、解決していく学習活動は運動有能感が低いとされる集団においては運動有能感の向上がみられた。

このことから、動画比較を用いることは、児童の課題発見の役に立つということ。そして、運動有能感の低い児童にとって課題発見・解決活動を取り入れた実践を行うことは、児童の運動有能感の向上に繋がるということがわかった。最後に、指導の在り方についても今後の課題を明らかにすることができた。

キーワード 小学校体育 課題発見・解決活動 運動有能感 動画比較

1. はじめに

文部科学省の平成27年度「教育課程企画特別部会 論点整理」によると、次期学習指導要領の改訂に向けて「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）」について議論や検討を重ねられてきている。その中で、日本の子どもは、国際的に見て「自己肯定感」や「主体的に学習に取り組む態度」などが相対的に低く、自ら能力を引き出し、主体的に判断し行動することに課題があるとされている。

そこで、本実践研究では、児童が「自ら課題を発見し、それを解決していく過程」に焦点を当てた。そして、小学校体育科（マット運動）での授業実践において、課題発見・解決活動を継続的に行い、児童に課題発見を促すための手立てとして「手本の動き」と「比較したい動き」の2種類の映像をタブレット端末で比較する「動画比較」を取り入れた。このような実践から、子どもの主体的な学習活動を支援する上での課題を明らかにし、今後の指導力向上に資することをねらいとした。

2. 実践研究計画

まず、Dweck(1986)の達成目標理論をもとに、児童一人一人に「熟達目標」をもたせるようにした。そのために、毎回の実践授業で「学習カード」に自分の課題や課題解決するための練習法を記述させ、記述したものを次の授業実践の冒頭で確認させるようにした。

次に、児童が自ら達成目標を立て、それを達成するといったプロセスを経験するために「課題発見・解決活動」を取り入れた。

課題発見活動について

課題発見活動は、自分の課題を発見する学習活動である。そのために、この活動では主に2つの教材を用いるようにした。

1つ目は、タブレット端末である。これを用いて、児童が「手本の動き」と「比較したい動き」の違い(自分の課題)に気づくために「動画比較」をさせた。「動画比較」とは、「手本の動き」と「児童自身の動き」の2種類の映像をタブレットの画面上で同時に再生することで、動きを比較し、自分の課題を発見する手法である。

2つ目は、右に示す「技のコツカード」である。これは、開脚後転の動きのコツとなる部分(「おしりの位置」、「クルンパ」、「押し上げ」とその動きの達成度(「バッチリ」、「もう少し」、「がんばろう」)を2次元の表形式で示したものである。また、写真に線を入れることで観察する視点を視覚的に示した。



▲写真1：開脚後転の技のコツカード

課題解決活動について

課題解決活動は、課題発見活動を通して発見した課題を解決していく学習活動である。ここでは、課題に応じて用意された練習教具を活用したり、技ごとに用意された練習場所を選択したりすることで、児童一人一人が課題解決を図ることができるようにした。また、課題を解決する喜びを児童同士でも共感することができるように児童同士で教え合ったり、練習の補助をし合ったりすることも促すようにした。

以上のような取組を取り入れた授業を行うために以下に示す「単元計画」を担当の先生と共に作成した。

▼表1：マット運動の単元計画

時間	単元の位置づけ	各授業の内容
1	ガイダンス	授業でのルールの確認したり、児童のレディネスの把握をしたりする。
2	技のコツについて学ぶ	前転系の技について学習する。
3		後転系の技について学習する。
4		倒立系の技について学習する。
5	学習した技の技能を高める	動画比較や技のコツカードを活用して、課題を発見する。
6		見通しをもたせて課題解決に取り組む。
7		よりよく課題を解決したり、発展課題に取り組んだりする。
8	発表会を行う	できる技の中から連続技をつくり、練習をする。
9		連続技の発表会を行う。

実施単元 : 体育(マット運動)9時間構成

実施校 : 長崎市立X小学校

対象 : 第6学年2組(22名)

実施日時 : 実践授業① [H28.9.21]

実践授業② [H28.9.26]

実践授業③ [H28.9.27]

表1に示す単元計画の中の「学習した技の技能を高める」(5、6、7/9時間目)ことをねらいとした授業で、課題発見・解決活動を取り入れ本実践研究を計画した。具体的には、課題発見活動を実践授業①(5/9時間目)、課題解決活動を実践授業②・③(6/9,7/9)で行った。

まず、実践授業①(5/9時間目)では「動画比較や技のコツカードを活用して、課題を発見する授業」として、児童一人一人が「開脚前転」、「開脚後転」、「側方倒立回転」の3種類の技について自分の課題を把握する活動(課題発見活動)を行った。本時の課題発見は、これから2時間かけて課題解決を行っていくために、課題解決の方法について見通しを立てることをねらいとした。そのため、活動の中では同じ班の児童と協力しながら、「手本の動き」と「自分の動き」の2種類の映像を動画比較したり、技のコツカードを使って技の完成度を確認し合ったりするようにした。

次に、実践授業②(6/9時間目)では「見通しをもたせて課題解決に取り組む授業」として、前時(実践授業①)に児童一人一人が発見した課題を解決するために、適切な練習場所を自分で選択し、課題解決に取り組む活動(課題解決活動)を行った。本時の課題解決活動は、前時の学習カードの記述内容を確認し、児童一人一人が課題の解決方法について見通しをもつことから始めた。そして、技ごとに練習ができるように、それぞれ練習場所を設定したり、課題解決を促すための練習教具も揃えたりした。また、後半の活動から3種類の技(開脚前転、開脚後転、側方倒立回転)全てができた児童は、発展技にも取り組めるようにした。

最後に、実践授業③(7/9時間目)では「よりよく課題を解決したり、発展課題に取り組んだりする授業」として、前時(実践授業②)に引き続き、課題解決活動を行った。本時は、特に一人一人の技能の向上を目指して、前半の活動から課題を克服するために引き続き練習を行ったり、別の技の課題を克服するために練習場所を変えて練習を行ったり、発展技の練習にも挑戦するという多様な活動ができるようにした。

以上のような実践を通して、児童の運動についての自信がどのように変容したのか分析するために実践授業①の実施前と実践授業③の実施後に1回ずつ運動有能感測定を行った。また、課題発見活動に動画比較を用いることは、課題発見の役に立ったのか分析するために実践授業①の実施後にアンケート調査を行った。

3. 動画比較や技のコツカードを活用して、課題を発見する授業(実践授業①)

実践授業①：概要

日時：平成28年9月21日(水) 15時00分～15時45分

場所：長崎市立X小学校 体育館

対象：6年2組 男子9人(見学者2人含む) 女子13人 計22人

本時のねらい：開脚前転・開脚後転・側転の自分の課題を発見しよう。

※以下に示す表は、本時で行った活動の概要と予定していた時間配分である。また、同じ表の中で、網掛けがついている部分は本実践研究と関わる「課題発見活動」を表す。

▼表 2：実践授業①の活動の概要と予定していた時間配分

時間	児童の活動
5	準備運動・体ほぐし運動を行う。
10	本時の学習課題について見通しをもつ。
10	各班に分かれて、「開脚前転」、「開脚後転」、「側方倒立回転」を行い、その技の動きをタブレットで撮影する。
5	見本の映像と比較して自分の課題を発見する。
5	片付けを行う。
5	本時のふりかえりを行う。



▲写真 2：課題発見活動（後半）の様子

▼表 3：児童が発見した課題について技ごとにまとめたもの

課題とする技	人数	内容（複数回答・白紙回答を含む）	
開脚前転	16/20人	足を開く	3人
		両手の位置	3人
		両手で体を押し上げる	1人
		足を曲げない	7人
開脚後転	18/20人	足を開く	3人
		足が曲がっている	8人
		勢いが足りない	1人
		おしりの位置	4人
		押し上げていない	4人
側方倒立回転	15/20人	後転段階でのつまづき	1人
		足が曲がっている	10人
		体重移動	6人
		着地の足幅	1人
その他	1/20人	手足のつけ方	1人
		両手と目線の位置	4人
		ブリッジ：頭を持ち上げるところ	1人

▼表 4：3種類の技のコツについて

技名	技のコツ
開脚前転	クルリンバ
	両手の位置
	押し上げ
開脚後転	おしりの位置
	クルンバ
側方倒立回転	押し上げ
	両手・目線の位置
	蹴り上げ
	体重移動

は、5つに分類され、そのうちの3つが技のコツカードで示した内容と同じものであった。このことから、児童は技のコツカードを用いながら、自分の課題を発見していたことがわか

課題発見活動の前半は、タブレットを取り扱うことが児童の興味・関心を引き出し、多くの児童が進んで活動に入ることができていた。班での活動の様子を観察したところ、動きを撮られる側と撮影する側それぞれに緊張感が生まれていた。動きを撮られる側には「始めていい？」や「撮れている？」といった撮影してくれる児童に何度も確認をとっている姿がみられた。動きを撮影する側には、人の動きを撮影するという重要な役割を与えられたため、責任をもって真剣に活動に取り組んでいる姿がみられた。

課題発見活動の後半では、手本の動きと自分の動きの映像で動画比較を行い、技のコツカードと照らし合わせることで自分の課題を発見する活動を班で協力して行った。ほとんどの班で、タブレットと技のコツカードを中心に置き、グループ全員で輪になって仲間の技の到達度を確認し合う児童の姿がみられた。

本時の振り返りでは、学習カードを用いて振り返るようにした。その結果、課題発見活動を行った児童全員（20名、見学をした児童2名を除く）が自分の課題を見つけることができていたことがわかった。そして、児童が発見した課題を技ごとにまとめると左の表に示すことができる。※表3の太字で示したものは、表4に示す技のコツカードの内容と合致しているものである。まず、開脚前転について課題を発見した児童は20人中16人（見学者2人を除く）であった。課題の内容としては、4つに分類され、そのうちの3つが技のコツカードで示した内容と同じものであった。次に、開脚後転について課題を発見した児童は20人中18人であった。課題の内容としては、6つに分類され、そのうちの3つが技のコツカードで示した内容と同じものであった。最後に、側方倒立回転については20人中15人であった。課題の内容として

る。そのため、課題発見活動を行った 20 人全ての児童が自分の課題を発見することができていたことがわかる。

4. 見通しをもたせて課題解決に取り組む授業（実践授業②・③）

実践授業②：概要

日時：平成 28 年 9 月 26 日（月） 8 時 50 分～9 時 35 分

場所：長崎市立 X 小学校 体育館

対象：6 年 2 組 男子 9 人（見学者 1 人含む） 女子 13 人 計 22 人

本時のねらい：前時に見つけた課題を解決するために、練習をしよう。

実践授業③：概要

日時：平成 28 年 9 月 27 日（火） 14 時 10 分～14 時 55 分

場所：長崎市立 X 小学校 体育館

対象：6 年 2 組 男子 8 人（見学者 1 人を含む、欠席 1 人除く） 女子 13 人 計 21 人

本時のねらい：前時に見つけた課題を解決したり、技を高めたりするために練習しよう。

※以下に示す表は、本時で行った活動の概要と予定していた時間配分である。また、同じ表の中で、網掛けがついている部分は本実践研究と関わる「課題解決活動」を表す。

▼表 5：実践授業②・③の活動の概要と予定していた時間配分

時間	児童の活動
5	準備運動・体ほぐし運動を行う。
10	本時の学習課題について見通しをもつ。
10	各練習場所で練習を行う。
5	再び、各練習場所で練習を行う。
5	片付けを行う。
5	本時のふりかえりを行う



▲写真 3：実践授業②の課題解決活動（前半）の様子

課題解決活動に入る前に、児童一人一人に前時に使用した学習カードの記述内容を確認させ、自分の課題を明確に意識させた。また、課題とする技の練習場所や練習方法を全体で確認することで、前半の課題解決活動に戸惑うことなく入れるようにした。

課題解決活動の前半では、技ごとに用意された練習場所で、個人で練習を行わせた。また、同じ場で練習をする他の児童とアドバイスを申し合ったり、練習の補助を協力してしたりしていた。

後半の課題解決活動に入る前に、児童を集合させ課題解決の進捗状況を確認した。また、観察の仕方や新しい練習場所を設置することなど、活動に必要な連絡を行った。

課題解決活動の後半では、引き続き自分の課題を解決するために練習を行ったり、発展技の練習に挑戦したりする児童がみられた。また、課題解決活動を何度か繰り返すことで、児童の学び方に変化がみられた。例えば、発展技の練習に取り組むためには、3 種類の技（開脚前転、開脚後転、側方倒立回転）の全てができることを条件としていたので、一生懸命 3 種類の技の練習に取り組もうとする児童の姿がみられた。他にも、練習場所での待機位置が他の人の動きを観察するためにマットの後方から側方周辺へと位置が変化したり、児童同士でアドバイスを申し合ったりするような姿もみられるようになった。

これまでの実践授業で活用した学習カードの記述内容をもとに分類するために基準を作成した。実践授業①の列は、実践授業①の学習カードの記述内容から、課題発見活動を通して課題を見つけることができた技として確認できたものに○をつけている。実践授業②の列は、実践授業②の学習カードに「特に練習をする技」として記述しているものに○をつけた。写真4のように実践授業③の学習カードに「これまでの授業を通してできるようになった技」にチェックをさせ、チェックが付いたものに○をつけている。

▼表6：これまでの実践授業で活用した学習カードの記述内容の分類

実践授業①	実践授業②	実践授業③	タイプ	内容
○	○	○	1	自分の課題を意識して、練習を行い、技能習得できたと感じている。
○		○		
○	○	○	2	課題意識をもったが、練習まではできていない。もしくは、練習をしたが、技能取得できなかったと感じている。
○				
	○		3	もともとできていた。
		○	4	反応なし

今までの授業できるようになった技に☑をしよう!!

前転① 後転② 頭倒立③ 背倒立④ 壁倒立⑤

開脚前転⑥ 開脚後転⑦ 側転⑧

とび前転⑨ 伸膝後転⑩ 倒立前転⑪

後転倒立⑫ ロンダード⑬ 伸膝前転⑭

▲写真4：実践授業③の学習カードの一部

※斜線：実践授業を欠席したり、見学したりした場合

▼表7：これまでの実践授業で活用した学習カードの記述内容の分類

番号	開脚前転	開脚後転	側方倒立回転
1	3	1	3
2	1	1	2
3	2	1	2
4	2	1	1
5	1	1	2
6	1	1	3
7	1	1	2
8	2	1	1
9	1	3	1
10	1	1	1
11	1	1	1
12		2	
13	3	1	3
14	1	1	2
15	1	1	2
16	2	2	2
17	1	1	1
18	1	1	1
19	1	1	1
20	1	1	2
21	1	3	4
22			

表7より、多くの児童が連続した授業実践を通して「開脚前転」、「開脚後転」、「側方倒立回転」の3種の技について技能を高めていることがわかった。「2」がついている児童については、他の技に挑戦して完成度を高めている姿が確認できる。

3種類の技全てにおいてタイプが「2」であった児童16は、まずは技ができるようになることを目指して「後転」に焦点を絞り、予備技（ゆりかご等）の段階から個別で指導を行ってきた。そのため、児童16は毎回の実践授業の中で後転の技能を高めることができていた。実際に、各実践授業の感想にも児童16の喜びは表れている。実践授業①では、「映像をもって、自分のしかたが見れて、課題がくわしくみつかったのでよかったです。」というように自分の課題を発見した喜びについて述べていたことがわかる。

実践授業②では、「いつもより、できるようになって、でもまだかんぜんにできていないのでがんばります。」というように後転の練習を始めて、少しずつ自分の技能の高まりを感じていることがわかる。実践授業③では、「手が、マットにつけたり最初のときより、だいぶまくなったのでうれしいです。」というように後転をする際にマットに手をどのようにつけるのかコツがわかったり、授業を始めた頃より後転が上達してい

映像でとって、自分のしかたが見れて、
課題がくわしくみつかったので
よかったです。

▲写真5：児童16の実践授業①の感想

いつもより、できるようになって、でも
また「かんぜん」にいきえないので、
かんばります。

▲写真6：児童16の実践授業②の感想

手が、マットにフケたり最初のとまより、
たいがうまくなつたのでうれしい
です。今で、できなかつた次に、おぼえ

▲写真7：児童16の実践授業③の感想

ることを実感してたりしていることが記述から伺える。

このように、課題発見・解決活動に継続して取り組んできた児童は3種類の技の中で「技能が高まった」と実感していることがわかる。また、3種類の技のタイプが全て「2」であったとしても本人は自分の技能の向上を実感していることがわかる。

5. 課題発見活動における動画比較についての児童の評価

▼表8： 動画比較を活用した課題発見活動についてのアンケート調査（質問項目：1）

自分の課題を見つけるために、動画比較法は役に立ちましたか？一つに○をつけなさい。				
	役に立たなかった	あまり役に立たなかった	少し役に立った	役に立った
人数	1	1	4	16
%	4.55	4.55	18.18	72.73

実践授業①の終了後に、自分の課題を発見するために「動画比較」を活用することは役に立ったのか「役に立った」、「少し役に立った」、「あまり役に立たなかった」、「役に立たなかった」の4件法のアンケート調査を行った。その結果を表したものが左の表である。

この表から、児童にとって、課題を発見するために、動画比較法は「役に立った・少し役に立った」と回答している人は、22人中20人と全体の約9割を占めていた。（残りの2人については、役に立たなかった：1人、あまり役に立たなかった：1人）そこで、役に立った・少し役に立ったと回答している児童には「どんな風に役に立ちましたか。」と自由記述形式で質問をした。その結果、「自分がどれだけできていないかお手本と比べることで、修正しないといけないことがわかり役に立ちました。」というお手本との比較が、課題の発見に役に立ったと回答している児童は、20人中11人であった。このことから、「手本の動き」と「自分の動き」を比較することは、課題発見を促すということについて、一定の効果があるということがわかった。また、「役に立たなかった」と「あまり役に立たなかった」と回答した2人の児童のうち1人は「足と手の位置も、役に立ったと思います。」と記述していた。この児童にとって、課題を発見するためには動画比較だけでなく、映像を観察するための視点を明示した「技のコツカード」も課題発見の役に立ったと感じたようであった。

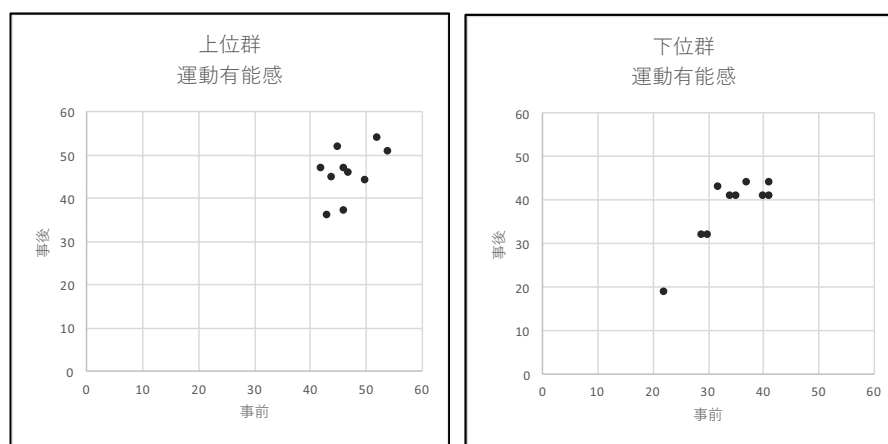
6. 運動有能感の変容からみる児童にとっての実践の評価

「運動有能感測定尺度」を用いて実践授業①を行う前と実践授業③の終了後に1回ずつ実践授業を受けた児童22名を対象に運動有能感測定を行った。そして、2人の児童が途中で見学をしたり、欠席をしたりしており、全ての実践授業に参加できていなかったため分析の対象から除くことにした。そのため、分析の対象を20人とし、事前の運動有能感測定の結果での運動有能感の得点が高い順に児童を並べた時、上位50%（10人）を「上位群」、下位50%（10人）を「下位群」とした。また、実践の前後で、上位群と下位群の運動有能感得点の変動が見られたのかt検定（有意水準5%、両側検定）を行ったところ以下のような結果が得られた。

▼表9：運動有能感測定結果

群	項目	事前平均	事後平均	事後平均-事前平均	s	両側確率
事前	運動有能感	46.9	45.9	-1	4.7791	0.4013
上位群 (N=10)	身体的有能さの認知	13.5	14	0.5	2.6995	0.5042
	統制感	17.3	15.8	-1.5	2.3764	0.0957
	受容感	16.1	16.1	0	2.3431	1
事前	運動有能感	34.1	37.8	3.7	6.9532	0.0056
下位群 (N=10)	身体的有能さの認知	7.5	8.7	1.2	2.8965	0.3051
	統制感	13.4	14.9	1.5	3.5111	0.2729
	受容感	13.2	14.2	1	3.5930	0.3934

検定結果によると下位群の運動有能感得点の変容において統計的に有意な差が見られた。



▲図1：上位群と下位群の運動有能感測定結果

上に示すグラフは、上位群と下位群の運動有能感測定結果を2次元のグラフにまとめたものである。「運動有能感得点（事前）」を横軸にとり、「運動有能感得点（事後）」を縦軸にとっている。点は、各群に位置する児童の運動有能感得点をもとにプロットしたものである。基準線（グラフ中の斜めの直線）より上側に点がプロットされた場合は、実践授業を通して運動有能感得点の向上を表している。このグラフによると、上位群では、実践を通して運動有能感の得点の向上が見られた児童が10人中5人であった。しかし、下位群では10人中8人の児童に得点の向上が見られた。（1名減少、1名変化なし）

これは、運動有能感を構成する各因子の平均点について、上位群では、向上したもの

（「身体的有能さの認知」において0.5ポイント）とそうでないもの（「統制感」において1.5ポイント、「受容感」は変動なし）が見られたのに対し、下位群では全ての構成因子で平均点の向上が見られた。（「身体的有能さの認知」において1.2ポイント、「統制感」において1.5ポイント、「受容感」では1ポイント）その要因として、本実践が下位群の児童にとって「今までできなかった技ができるようになった。」という達成感を得ることができたことが「身体的有能さの認知」の向上に影響したと考えられる。また、同じ場で練習をする仲間から練習のサポートをしてもらったり、「ここまでできるようになったね。」という励ましの言葉かけてもらったりしたことが「受容感」の向上に繋がり、児童が自ら課題を発見し、解決していく活動を継続して行ったことが「統制感」の向上に繋がったと考えられる。

このことから、本実践は運動有能感が低いとされる児童にとって、運動有能感を高める実践であったことがわかる。

7. 本実践の成果

本実践は、児童が課題を発見し、それを解決していく過程に重きをおいてきた。そして、動画比較を用いることで課題発見を促し、児童一人一人が明確な課題意識をもって課題解決活動に取り組めるようにしてきた。この実践を通して、運動有能感が低い児童の運動有能感が高まったことから、実践の効果を期待できる成果を得ることができたと考えている。

動画比較については、動画比較を用いた課題発見活動に参加した児童の約9割が、動画比較が課題を発見するために「役に立った・少し役に立った」と回答していた。そして、その理由として、「手本の映像と自分の動きを比較することができるので、課題発見の役に立った」と回答していた児童が多く見られた。このことから、比較対象があることは、児童にとって課題発見を促すことができる可能性があるということがわかった。

8. 研究の成果から得られた教員の資質向上のための課題

(1) 本実践を通して、得られた課題について3点述べる。

①：課題発見活動における児童の運動時間（体を動かす時間）の確保について

実践授業①で行った「課題発見活動」では、児童は班でタブレットを囲み、自分の課題はどこにあるのか映像分析を行っていた。しかし、課題を発見するために時間を多くかけてしまい、授業時間のほとんどを座って過ごすという活動になってしまった。体育の時間における「運動時間」の充実には、体育の授業を充実させるために重要であるとされている。そのためにも、今回の実践のように観察を通して課題を発見するだけでなく、これからは体を動かしながら課題を発見していくといった、児童の運動の流れを止めない工夫を取り入れていく必要がある。

②：短時間で効率的に児童一人一人に課題を把握させるためのタブレットの使い方について

今回は、「児童一人一人が課題を発見し、自分で解決していくこと」に重きを置いて実践を行ってきた。そこで、児童による課題発見を促すために児童がタブレットの操作を行うようにした。しかし、動画比較を行うためには、児童にとって「手本の映像と比較ができる映像を撮影すること」と「映像を比較して違い（課題）を発見すること」の2つの壁を乗り越える必要があった。そのため、児童一人一人が課題を発見するために多くの時間がかかって

しまい、課題解決に当てる時間を確保することができなかった。技能習得には誰しも時間がかかるものであり、課題を解決するための時間を確保することは重要なことである。そのためにも、より効率的に課題を発見する手法を実践の中に取り入れることが必要である。

③：課題解決の意欲を維持させることが出来なかった児童への対応について

本実践では、活動中に成功経験を積み重ねることが出来ずに、最後まで活動に意欲をもって取り組めなかった児童がいた。その要因として、筆者が児童一人一人のつまずきを十分把握できず、個に応じた指導を行うことができなかったことが挙げられる。今回の実践のように児童だけの力では課題を解決させることができない時がある。そのためにも、全体を見渡せる位置で児童の様子を観察するなどによって、児童一人一人のつまずきを把握し、児童と一緒に課題を発見したり、練習の補助を個別に行ったりするなど、個に応じた指導を適宜行っていく必要がある。

(2) 先に示した、実践の課題をもとに、これから筆者が「体育の授業づくり」として取り組んでいくこと述べていく。

①：児童にとって「自ら課題を発見し、自ら課題を解決していくことができる」環境づくり

自ら発見した課題を一つ一つ解決していくことは、児童にとって「できた」という達成感を得ることに繋がると筆者は考えている。そのためにも、「課題発見・解決活動」を取り入れた実践を行っていく。また、動画比較など課題発見の方法を充実させたり、発見した課題を解決するための練習の場や練習教具を充実させたりすることで、「課題発見・解決活動」を充実させていく。

②：児童にとって「挑戦していくことができる」環境づくり

「苦手だけどやってみよう」や「得意だからもっとやりたい」という児童が挑戦しようとする気持ちは様々であるが、その根底には「もっと上手になりたい」という気持ちがあると筆者は考えている。そのような児童の気持ちを引き出すことができるように、運動が苦手な児童には「こうすれば、上手くできる」と具体的な課題解決方法を示したり、運動が得意な児童には「こんなことにも挑戦してみたら」といった新たな目標を提示したりして行く。

③：児童にとって「つまずいても安心して学ぶことができる」環境づくり

学習中につまずいた時、他の児童が助けてくれたり、先生が教えてくれたりするという安心感は、児童にとって自分から進んで学ぶために必要だと筆者は考えている。今回の実践では、その安心感を得ることができた児童と、そうでなかった児童がいた。児童一人一人が安心感をもって活動に取り組むために、どこで児童がつまずいているのか実態把握を徹底的に行なって行く。そのためにも、児童全員の学習の様子を俯瞰できる位置で観察を行ったり、学習カードの記述内容を分析したりして行く。

9. 謝辞

本実践研究に関わってご協力下さったすべての方々に厚く御礼を申し上げます。

10. 参考文献

文部科学省(2015)「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」

岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎(1996)「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研

究」 スポーツ教育学研究 16(2) pp145-155
文部科学省 (2008 「小学校学習指導要領解説 体育編」